失われゆく延喜式内社を求めて【第六回】　青年版国民栄誉賞〝人間力大賞〟受賞者

『八咫鏡』の製作者を祀る
―延喜式内社・山方比古神社（立岩神社）

延喜式内社で祀られる神々は、神話世界で重要な役割を果たす存在であり、それぞれが象徴的なキャラクター性を担っています。今回、訪ねるのは三種の神器のひとつとして知られる「八咫鏡」を製作した日本最古の職人を祀る古社。日本人にとって職人技術、製鉄、あるいは鏡とは何か。日本古代の世界観の中に、現代の私たちが忘れてしまった日本人本来の考え方が秘められています。

オキタリュウイチ　クリエイティブディレクター
昭和51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで17億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

伊勢神宮の御神体を造った天津麻羅

――今回は、延喜式内社の中でも、とりわけ珍しい神社をご紹介されるとのことですが、いったいどんな神社で、どんな神が祀られているのでしょうか。

オキタ／今回は、徳島市の多家良町にある山方比古神社（金山神社）、その奥の院である立岩神社をご紹介します。鍛冶の神、金山比古神、鍛冶の神である、天津麻羅を祀る神社です。

――同じ鍛冶技術を有する、異なる神様がそれぞれの神社に祀られているのですか？

オキタ／この二つの神、金山比古神と天津麻羅は、異なる名前ですが、私は同一の神であると捉えています。そして、なんと『古事記』に出てくる〝天津麻羅〟という神は、三種の神器のひとつ「八咫鏡」を製作した、日本最古の〝工芸職人の神〟ともいえる神ですね。

――あの有名な「八咫鏡」を製作した神様ですか。日本創生においてとても重要な意味をもつアイテムですから、この神の存在も相当重要ですね。

オキタ／『古事記』のなかで「八咫鏡」についての記述が登場するのは、天之岩戸隠れのシーンですね。天照大神が岩の洞窟に隠れた際に、榊に掛けた大きな鏡を岩戸の前に置き、「あなたより尊い神が現れた」と言って、天照大神ご自身の御姿を映し出す。見とれた瞬間に天手力男神が岩戸を開く……というあのシーンです。

その後、天孫降臨のくだりで、天照大神が孫の瓊瓊杵命に、「これを私だと思いなさい」と言って、渡すのも「八咫鏡」です。その後は、代々、皇位継承の際に三種の神器のひとつとして受け継がれていったのは、ご存知の通りです。その神鏡は、いまでは式年遷宮に千四百万人もの参拝者が訪れる、伊勢神宮の御神体になっています。

日本の神話において重要な「八咫鏡」を製作した技術神が祀られている式内社が、いつ行っても非常に閑散とした状態で、社殿も質素な小祠なのです。この写真をご覧ください……延喜式内社であるにも関わらず、こんなにこじんまりした神社なんですよ。

――これが延喜式内社の社殿なのですか？ ちょっと信じがたいですね！

オキタ／きっと、近隣の氏子の方が手を入れてくださっているのか、社殿はいつも清浄な状態で保たれていますが、重要な神様なのに扱いが残念で、人々から忘れ去られようとしています。ところが、この社には衝撃的な口伝が残されています。この一帯は「八多」という場所であり、この地で製作された鏡なので「八咫（八多）の鏡」であると、地元では伝承されているのです。

伝承によると、この地域には天津麻羅というタタラ職人集団が住んでおり、〝出張形式〟で現場まで出向き、依頼に応じて現地で製品を納入した、と伝えられています。この町の町名「多家良町」も、タタラが訛ったものだと古来より云い伝えられてきました。この地にはタタラ場跡があり、実際、明治の終わりから昭和初期までタタラが踏まれていたそうです。今は、タタラを伝承する踊りのみがひっそりと残っており、その踊りも少しづつ失われようとしているのです。

千年単位で続く古い社や、それにまつわる伝承や口伝、踊りや独自の祝詞、神饌（神の好物、食事）などの情報が失われることによって、「決して華やかではないが、ほんとうの日本」が失われていく事実に、哀しみを抑えられません。

――ところで、これだけの技術を有していた、天津麻羅はどんな神だったのでしょうか？

オキタ／天津麻羅は、『古事記』上つ巻の中盤、「…天の金山の鐵を取りて、鍛人 天津麻羅を求ぎて伊斯許理度売命に科せて鏡を作らしめ…」という記述のなかで登場します。この一節から、伊斯許理度売命という神と協力して、「八咫鏡」を製作したエンジニアとしてまるでスティーブ・ジョブスのように信仰されたのです。「鐵を取って、それを鍛えた」とあるので、「八咫鏡」は銅鏡ではなく当時として は珍しい鉄製の鏡であったはずです。だとすると、天津麻羅が有していたのは、鋳型を用いた製銅技術ではなく、当時の最先端テクノロジーである踏鞴製鉄の技術だったのでしょう。

いったいどんな神様なのか、いまでは推測するしかありませんが、〇〇羅という呼び名は、〝阿修羅〟や〝因達羅（帝釈天）〟のように、海を越えた異世界に住む強大な存在に付けられることが多いため、渡来神であった可能性が高いと考えられます。また、〝神〟や〝命〟という尊称を付けられず呼び捨てにされていることから、複数人の職人集団をあらわす通称であったのかもしれません。

天津麻羅の子孫は、百済から渡来した韓鍛冶に対する倭鍛冶として、代々朝廷に仕え活躍し続けました。まさに日本における鍛冶技術の礎をなした一族であると言えます。

話は変わりますが、山方比古神社自体は、ひっそりとした雰囲気ですが、実はこの神社の〝奥之院〟にあたる社に秘密があります。神社の傍から鎮守の森に入り、しばらく道なりに進むと、でこぼこした急な坂道にぶつかります。この坂道を登っていくと、高さ10メートル、幅4メートルという日本最大の陽石が現れます。この巨岩こそ、鍛冶の神、天津麻羅のシンボル、古代の磐座、立岩神社なのです。写真をご覧ください。

――すごい巨石ですね！ この神社では、奥の院のほうが本体のような気がしますね。なぜこんな構造になっているのでしょうか？ 非常に不思議です。

オキタ／日本人の文化によく見られる〝窶し〟の構造になっているのではないでしょうか。この金山比古と天津麻羅、ふたつの神は、佐伯真魚と空海、そして弘法大師、のように名は違えど同一人物ではなかったか。そして、その立場や時期によってキャラクターや思想、業務内容が変わるのは自然なことではなかろうか。

これは、私たちの日常的な社会でもよく見られる現象です。会社では厳しい上司、家庭ではお父さん、同窓会ではお笑いのボケ担当……というように、同じ人物でも関わる環境によって、キャラ

山方比古神社の正面口。階段を登って森を進むと、立岩神社がある。

山方比古神社の社殿。

山方比古神社の奥の院にあたる、日本一の巨大陽石を御神体とする立岩神社。基部正面に二個の大玉石が配され、鞴（ふいご）を象徴している。　写真：石井友規

が変わってくる。しかも人間はその人生の中でさまざまなプロジェクトに関わっているため、ひとつの身体に多様な性格を内在させているのです。チームで動いている場合は、余計にそうですよね。働く場所、所属、環境、目標の変化、部下のスキルの変化などによっても、『私の仕事』や『在り方』は大きく変化する。

天津麻羅は、ときに金山比古に身をやつしていたと考えられるのです。そして、鍛冶職人の天津麻羅チームが、自分たちの職業を象徴するシンボルとして、この巨岩を尊崇するようになり、その後、天津麻羅そのもののシンボルとして、後世に語り継がれていったのかもしれません。

畏怖の象徴「鏡」と日本人

――現在でも、神社の奥には「鏡」が置かれていますが、当時の日本人にとって、鏡を祀るという行為はどんなことだったのでしょうか？

オキタ／元来、人間は自然界にもとからある事象と触れ合い、滝や磐座（いわくら）、樹齢千年の巨木などを崇拝の対象としてきたわけですが、「鏡」のような自然界に存在しない人為的な工業製品、プロダクトを神体としようとしたことは、日本の祭祀史上におけるイノベーションだったに違いありません。

移動不可能な、滝や磐座、神体山といった今までの御神体の構造から、人の手による「工業製品」を神体にしよう、という試みが、政治と神事が一体化していて、朝廷など政治の中心地が人間の都合で「引っ越し」せざるをえなくなっていた時代における神社の「あり方」のイノベーションでもあったと言えるでしょう。

天津麻羅はまさに、まるで江戸期と明治期のはざまのように、「神社」や「祭祀」における大変革期のはざまに存在し、その変革を担った中心人物としての在りようを旧式の「磐座」と最新式の「鏡」という相反する構造によって、自ら体現しているように思えます。

――当時の日本人にとって、〝鏡を造る、扱う人〟というのはどういう存在だったのでしょうか。

オキタ／そもそも、当時の人々にとって、製鉄技術は人智を超えた魔術的な行為であり、その技術を所有する人間は特別な存在でした。

「鏡」という不思議な存在に触れたことは、当時の日本人にとって新鮮な驚きだったでしょう。古代人は、光の屈折によって像が映るという反射のメカニズムについて認識がありません。

鏡の中にも現実世界と同じようなパラレルワールドが存在し、人間よりも尊い神々の世界が展開していると考えたのではないか。鏡が虚像であると考えるのは現代人の思考であり、古代の人々は、むしろ鏡にこそ〝実相〟があると考えたのかもしれません。

また、翻って世界の諸宗教を見てみると、やはり「鏡」というオブジェは特別であったことが分かります。たとえば、道教においては、霊力を得た証しとして自分の鏡を手に入れなければならないとされており、神道における鏡も、最初は大陸からもたらされたもので、霊的に意義のある鏡を持つ＝権力を持つ、という事に他ならなかったのです。すなわち、霊的権威の象徴として持ち込まれたと言えるでしょう。一方、西欧にとっての鏡＝ミラー（ｍｉｒｒｏｒ）は、奇跡や不思議さを表すラテン語のミラクル（ｍｉｒａｃｌｅ）が語源であることからも分かるように、自然の力学を超越したものとして考えられています。つまり、民族性を問わず、「鏡」は人類にとって畏怖すべき対象であり、鏡を扱う人間（神）に人々が惹かれていった事は言うまでもありません。

――最後に、日本人にとって製鉄とは、そして「鏡」とは何なのでしょうか。

オキタ／スマートフォンの画面にはさまざまな〝アプリ〟が並んでいて、いつでも目的に応じて情報を引き出せるようになっていますが、古代に人々にとって「鏡」はそれと同じ構造で、奥にある多種多様な霊力を引き出せる窓でした。霊力にはさまざまな形があり、自分たちにとって身近な神はもちろんのこと、外来の渡来神もそこに投影されたでしょう。神社に祀られる御神鏡の考えが、仏教にも取り入れられ神仏が習合した〝御正躰（みしょうたい）〟というコンセプトが生まれましたが、神々とともに本地仏の姿もまたそこに観じることが出来たのは、日本人の幅広い感性が成し得たことでした。

唯一の違いは、現代を生きる私たちは、スマートフォンの〝提供されるサービス〟ばかり触れ、夢中になっており、鏡の奥にある実体のない面影を察知する能力を忘れてしまったのかもしれません。鏡に映る自己の姿は自分であって己れ自身ではない、それは無数の御霊の仮姿であるというのが日本人の本来の考え方であり、それが自他を尊ぶ思想にもつながります。いま再び、日本人の〝霊性〟を思い起こすべき時代ではないでしょうか。

インタビューより編集構成／石黒壮明

巨大な岩石の脇に小祠が置かれ、鍛人、天津麻羅が祀られる。　写真：須恵泰正

山方比古神社に、日本各地から訪れた人々を案内するオキタ。

【延喜式内社とは何か？】

延喜式内社とは、延長５年（927年）にまとめられた『延喜式』の巻九・十に収められた「延喜式神名帳」に記載されている神社のことを指します。これらは、律令制のもと祭祀を司る神祇官から幣帛（神前への捧げ物）を受けとっていた神社であり、それゆえに非常に格式の高い神社であったと考えられます。延喜式内社は、全国で2,861 社3,132 座あったと記録されます。今日では、江戸期や明治期創建の歴史が浅い社や統廃合された社も多く、日本のルーツを知る上で、この「延喜式神名帳」の記述はとても重要な手掛かりになります。

【神社の基本情報】

延喜式神名帳 阿波国勝浦郡鎮座
式内社 山方比古神社（やまがたひこじんじゃ）
　※別称：金山神社
　末社 立岩神社
所在地：徳島県徳島市多家良町立岩 41
御祭神：金山比古神（山方比古神社）
　天津摩羅（立岩神社）